

南アフリカで思うこと

事件や事故が多発するアフリカ。
安全管理・危機管理の要諦とは。

2カ月前の訪問先でテロ事件

南ア特産ルイボス茶を使ったラテの香りを楽しみながら、のんびりデスクでPCを眺めていた1月15日の午後、その一報は突然飛び込んできた。「ケニア首都でテロ発生……」。即座に携帯を取りナイロビ支店に電話する。何回目かにつながったその先では、「現在、出張者も含めて安否確認中。現場付近に関係者はいない模様で情報収集中」との由。続いて危機管理のコンサルタント契約をしているC社のナイロビオフィスに電話をするがつながらない。それもそのはず、C社の入っているビジネス商業複合施設そのものがテロ現場だったのだ。ふと考えてみれば、ちょうど2カ月前、自分もその施設を訪問していた。当社支店事務所の新しい移転先を探していたのだ。おいしいタイ料理屋があったのを覚えている。と、そこには同業他社のオフィスが



ナイロビテロ事件の現場の第1次防御線である正面ゲート
(2018年11月、筆者撮影)



丸紅株式会社 アフリカ統括付
ヨハネスブルグ支店
さとうかずや
佐藤和哉

あったことも思い出した。皆さん無事だろうか。不安の募る中、なんとその会社の人物とLINEでつながった。

合言葉と数次防御線の大切さ

「全員無事だが、事務所の出入り口をバリエードでふさぎ、全員パニックルームに退避して救出を待っている」とのこと。普段は楽しいことにしか使わないLINEに緊張感が走る。「御身ひとつを大切に」という当社安全管理の社訓だけを送信して事態の推移を見守る。後日談によれば、その後、外部との交信にも成功し、救出部隊との「合言葉」も確認できて数時間後に全員無事救出となったわけだが、その合言葉こそ救出部隊が、救出を待つ一般市民とテロリストとを識別する重要な命綱だったというから「合言葉をいかにして入手するか」これは大切な留意点だ。またテロ集団の侵入を防ぐための数次防御線の有用さが改めて浮き彫りになった。当社の新事務所もその点を重視して改めてビルを選定を行い、また2次、3次の防御線が突破されても、最終的に当社事務所内には容易に入れない工夫を施すことにした。多くの犠牲者を出したテロだったが、結果として邦人関係者に人的被害が及ばなかったことは奇跡的な幸運であり、また少なからぬ教訓を得ることができた事件であった。